

1 単元名 比べて読もう

「一つの花」(今西祐行作)

2 単元目標

叙述から対比となっている部分を探し、その意味を考えたり、読み取ったことを進んで話し合ったりしようとする。(関心意欲態度)

登場人物の様子と場面の様子を、主題に関わるような言葉に気をつけて想像しながら読む。(読むこと)

題名にこめられた作者の思いについて自分なりの考えをまとめ、友だちの考えと比べながら考えを深めることができる。(読むこと)

3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

(1) 単元と指導

単元について

この物語は大きく三つの場面に分けられる。一の場面ではゆみ子が「一つだけちょうだい。」を覚えた理由と、それに対する両親の思いが描かれ、二の場面では戦争に行くお父さんを見送るお母さんとゆみ子様子と「一つだけの花」をゆみ子にわたすまでのお父さんの様子が描かれている。そして三の場面では十年後、お母さんとゆみ子だけの暮らしの様子が描かれており、「一つだけ」という言葉は全く出てこない。この場面の分け方は四年生の子どもでもわかりやすいだろう。

本教材は、戦争の物語でありながら、悲惨さや家族愛などという点で、「ちいちゃんのかげおくり」のように直接的な表現が出てこない。そのため、物語の背景や登場人物のおかれている状況や行動からその思いを想像するしかない難しさがある。小さいゆみ子を憂う両親と状況をわかっていないゆみ子の言動が、ただ淡々と語られている中、子どもたちが両親のゆみ子への気持ちを想像することはなおさら難しい。子どもたちも、今まで出会った教材文とは違う感じ方をすることが考えられる。「おもしろい。」「かわいそう。」「悲しい。」など、従来の教材文にあったような、わくわくまたはドキドキ感を感じる子どもは少ないだろう。この物語を読み深めていくうちに静かな感動を覚えられよう展開にしたい。

また、この物語のキーワードでもある「一つだけ」は物質的なもの、「一つの」は精神的なもの、さらに、「一つだけ」は唯一のもの、「一つの」はこれから増えるまたは他にもあるものと捉えてこの物語を考えてみる。すると、お父さんがわたした「一つだけの花」はゆみ子の「一つだけ」を満足させることが目的の一つであり、汽車の中からお父さんが見つめている「一つの花」には、不安とともに、ゆみ子への成長や幸せへの強い願いがこめられていると考えられる。そして、物質的に豊かになってきた十年後、「コスモスの花でいっぱい」と「コスモスのトンネル」という言葉によって、お父さんのゆみ子への成長や幸せへの願いが、実を結んでいることがわかるのである。物語の題名が「一つの花」であることから、これらのことが想像できる。

学習過程について

本単元は、文学作品を扱った教材である。理想としては子どもたちの一人読みの後「一つだけ」と「一つの」の違いから、「一つの花」の意味を考え合えるとよいのだが、この時期の子どもたちにはまだ難しい。「登場人物の気持ちを考えよう」という学習課題を始めにたてるという方法もあるが、最終的に、「一つだけ」と「一つの」の違いに、子どもたち自らの力で目を向けてほしいとの願いから、子どもたちには、「対比」しながら読むということを始めに指導する。具体的には、「様子・情景」「登場人物の言動」「言葉」が「似ているけど違う」「変化してい

る」「同じ状況なのに違う表現をしている」ものの意味を考えることを「対比」と伝える。そして、子どもたちが、どの部分が対比されていると感じたのか、対比している意味は何なのかを考えながら読み、その都度出てくる子どもたちの感想や疑問を大切にしながら学習を作っていく。ただし、たくさん出てきた場合は、「一つの花」という題名がついた理由を探るために必要と思われる部分を決め、そこをくわしく読んでいくようにする。

子どもたちは、対比しながら読むという経験はほとんどないため、始めはそれを見つけることが意欲につながるだろう。そのスキルの意欲が、対比されている言葉や文章の意味を考えていくことで、隠された意図を理解し読み深めるといった意欲につながっていくようにしたい。繰り返し出てくる「一つだけ」という言葉も、その言葉を使う人物によって意味が異なってくる。対比することで、「一つだけ」の持つ意味の違いに子どもたちは気づいていくだろう。その違いがわかるとたった一度だけ出てくる「一つの」という言葉にも着目せざるをえない。そして、ゆみ子自身は意識していなくてもお父さんの願いが実を結んでいることに、言葉や文章だけでなく場面全体の対比によっても気づくだろう。

ひびき合いについて

単元についてでも述べたように、この物語に登場人物の直接的な感情表現はほとんど出てこない。そのため、言葉や文章を手がかりにしたとしても、子どもたちの読み方には違いが現れるだろう。対比部分を探し、対比となっている意味を一人ひとりが考えることで、「自分とは違う、または同じ考え方があることを知りたい。」という気持ちと、「一つの花」という題名がついた理由を考えてみたいという気持ちを知的好奇心としてとらえる。

また、「ひびき合い」の場として全体での話し合いを設定する。基本的には個の読みの時間を十分に確保してから話し合いを行う。子どもたちによっては、友だちと相談したいという願いを持つ子どももいるので、場合に応じて、グループでの意見交流の時間も設ける。話し合いを通して、自分の考えに自信が持てたり、考えが変化したり自分の考えの理由づけが増えたりすることが、本単元における「ひびき合い」としたい。

そして、多様な読みがあってもいいのだが、自分以外の読みに触れることで読みの幅が広がるということを意識させるため、授業後に「振り返り」を行う。これは、授業ではっきりわかったこと、友だちの考えから学んだこと、新しく生まれた考えのこと、さらに考えてみたいことという視点で書かせるようにする。単なる学習感想ではなく、この学習で自分が何を学んだのかがわかるような形式にする。これらを通して、「みんなで学習してよかった。」という実感を子どもたちが持てるようすると同時に、授業の中でひびき合いが見られたかどうかの「見とり」としたい。また、この物語の内容から考えて、じっくり静かに考えたいと願う子どもたちもいるだろう。発言だけでは見ることのできない「ひびき合う」姿を見られればと考えている。

4 単元指導計画（全10時間）

次	時	学習活動	主な支援・留意点【評価】
1	1・2	「一つの花」を読んでみよう。 ・題名読み ・自力読み 教師の範読 感想を書こう。 感想を交流しよう。	・題名から想像できることを発表させるようにする。 ・わからない漢字や語句を確かめながら読んでいく。 ・感想交流の後、対比しながら読むことを伝え、対比のしかたを指導する。 ・戦時下の生活についての感想が出ることが考えられるので、その点については、別の時間に学習する。 【関心意欲態度】【言語】
	3	三つの場面に分けよう。 ・自力で分ける グループで分ける みんなで分ける	・時の変化を意識して分けるよう伝える。 ・自力で分けることが難しい子どもには、視点を与える。 【関心意欲態度】【読む】
2	4・5・6・7・8 (本時7時間目)	対比されている言葉や文章を探して、その意味を考えよう。 ・時代の背景 ・「一つだけ」の使われている場面 ・両親とゆみ子の心情 ・戦争に行く人々の様子 ・見送りの際の、ゆみ子と父の様子や心情 ・「一輪のコスモスの花」の表現方法(本時) ・戦争中と戦争後の暮らしなど	・「対比」の視点を与える。 ・「一つの花」という題になっている理由を探るために、くわしく考える必要がある部分をみんなで決めていく。 ・学習後に振り返りを行い、解決しなかったものについて、全員で話し合うようにしていく。 【関心意欲態度】【読む】【言語】
3	9	「一つの花」の題名に作者がこめた意味を考えよう。	・これまでの学習をふり返ってから一人ひとりが考えをまとめ、話し合いを行うようにする。【関心意欲態度】【読む】
	10・11	ほかの題名をつけてみよう。 ・お父さんとコスモス ・コスモスの思い出 ・コスモスのきずな ・たかさんの一つの花	・今までの学習をふまえた理由づけを、しっかり行わせるようにする。 【関心意欲態度】【書く】【読む】
4	11	戦争に関係する本を読んで、紹介カードを書こう。 ・ちいちゃんのかげおくり ・かわいそうなぞう ・はだしのげん ・しんちゃんの一輪車	・ちいちゃんのかげおくりも含め、「一つの花」とどのように違うかを考えられるようにする。 【関心意欲態度】【読む】

5 本時について

(1) 本時目標

「一つだけの花」と「一つの花」に意味の違いがあるかどうかをみんなで考えることを通して、お父さんのゆみ子の成長への願いがこめられていることを考えることができる。

(2) 本時展開

学習活動	指導上の支援・留意点・評価()
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>「一つだけの花」と「一つの花」に違いはあるだろうか。</p> </div> <p>お父さんの気持ちの変化をみんなで考えよう。</p> <p>「一つだけの花」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おなかをすかせているゆみ子を、「一つだけ」で喜ばせたい。 ・今はあげられるものがないけれど、この花で喜んでほしい。 ・わすれられたようにさいている花を、お父さんだと思ってほしい。 ・ゆみ子に会うのは、これがさいごかもしれないから、笑顔を見たい。 ・自分らしめかもしれないから、お父さんの代わりだと思って大事にしてほしい。 ・食べ物ではない喜びもあることを知ってほしい。 ・この花だけしかないけれど、ゆみ子と自分の最後の思い出かもしれない。 <p>「一つの花」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆみ子が喜んでくれてよかった。 ・さようならゆみ子。もう会えないかもしれないから、元気でいてほしい。 ・その花をお父さんだと思って大事にしてくれるだろうか。 ・これから、ゆみ子の喜びがふえてほしい。 ・たくさんの喜びをもらえる世の中になってほしい。 ・家族のきずなとして、ふえてほしい。 <p>「一つだけの花」「一つの花」に違いはあるだろうか。</p> <p>ある</p> <p>・</p> <p>もう一度自分の考えをまとめよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どちらも同じ花であることを再度おさえる。 ・自分の考えをまとめておく。 ・話し合いの前に、友だちと相談したり自分の考えを再考したりする時間を設ける。 関心意欲態度 ・叙述に即した理由づけをさせるようにする。 ・「一つだけ」は、これまで出てきた食べ物のように、物質的な意味があるという考えも出てくるとよい。 ・「一つだけ」の意味がわからない場合は、「一つだけ」が使われている場面を想起させるようにする。 ・お父さんが、どのような気持ちで「一つの花」を見つめているのかを考えられるようにする。 ・同じ一輪のコスモスでも、違う意味が込められていることに気づいてほしい。 ・同じ考えでもつなげて言えるようにすることで、発表することに抵抗がある子どもも自信が持てるようにする。 ・人ひとりが、理由づけをしっかりと伝えるようにする。 読む ・あらかじめ考えていたものが変わる場合もあるので、考えをまとめる時間をとることも考えられる。 関心意欲態度

(3) 当日案

本時目標

花にこめられたお父さんの心情を比べることを通して、「一つだけの花」と「一つの花」が同じ意味かどうかをみんなで考えることができる。

学習活動	指導上の支援・留意点・評価()
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>「一つだけの花」と「一つの花」は同じ意味だろうか。</p> </div> <p>お父さんの気持ちの変化をみんなで考えよう。</p> <p>「一つだけの花」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おなかをすかせているゆみ子を、「一つだけ」で喜ばせたい。 ・今はあげられるものがないけれど、この花で喜んでほしい。 ・わすれられたようにさいている花を、お父さんだと思ってほしい。 ・ゆみ子に会うのは、これがさいごかもしれないから、笑顔を見たい。 ・自分しめかもしれないから、お父さんの代わりだと思って大事にしてほしい。 ・食べ物ではない喜びもあることを知ってほしい。 ・この花だけが、ゆみ子と自分の最後の思い出かもしれない。 <p>「一つの花」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これからどうなってしまうのか。 ・ゆみ子が喜んでくれてよかった。 ・さようならゆみ子。もう会えないかもしれないから元気でいてほしい。 ・その花をお父さんだと思って大事にしてくれるだろうか。 ・これから、ゆみ子の喜びがふえてほしい。 ・たくさんの喜びをもらえる世の中になってほしい。 ・家族のきずなとして、ふえてほしい。 <p>「一つだけの花」「一つの花」に違いはあるだろうか。</p> <p>同じ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どちらも同じ花だから。 ・ゆみ子との最後の別れというところが同じ。 ・お父さんがどちらゆみ子のことを考えているから。 ・家族のきずなだと思うから。 <p>ちがう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お父さんが花を持っていた時と、ゆみ子を持っていた時ではお父さんの気持ちがちがうから。 <p>もう一度自分の考えをまとめ、学習の振り返りをしよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どちらも同じ花であることを再度おさえる。 ・自分の考えを事前にまとめておく。 ・話し合いの前に、友だちと相談したり自分の考えを再考したりする時間を設ける。 ・一人ひとりが、理由づけをしっかりと伝えるようにする。 ・同じ考えでもつなげて言えるようにすることで、発表することに抵抗がある子どもが自信が持てるようにする。 ・これまでしてきた時代背景や叙述に即した理由づけをさせるようにする。 ・「一つだけ」という言葉は、これまで食べ物に関してのみ出てきたことを想起させるようにする。 ・お父さんが、どのような気持ちで「一つの花」を見つめているのかを考えられるようにする。 ・同じ一輪のコスモスでも、同じ意味と違う意味があることに気づいてほしい。 ・あらかじめ考えていたことが変わる場合もあるので、考えをまとめる時間をとることも考えられる。 ・「同じ」「ちがう」どちらの考えでも認め、今までの話し合いを考えの根拠となっていればよいこととする。 自分の考えと友だちの考えを比べて、話し合いに参加しようとしているか。 <p style="text-align: right;">【関心意欲態度】</p> <p>話し合いを通して、お父さんの心情を想像し、考えを深めることができたか。</p> <p style="text-align: right;">【読む】</p>

6 実践を終えて

(1) 本時までの流れ

初発感想交流から、子どもたちの思考の流れにそって学習を進めてきた。

C「他の題でもいい」(多数) T「今西さんがこの題にしたのはなぜか考えていこう」

場面分けの後、対比を探した。

T「この題にしたことと関係がありそうなところはどこかな」

C「一つだけの喜び」 「喜びなんて一つももらえないかもしれない」

「一輪のコスモス」 「一つだけのお花」 「一つの花」

「一つだけの喜び」 「喜びなんて一つももらえないかもしれない」から考えていきたい。

T「一輪のコスモス」 「一つだけのお花」 「一つの花」に關係する文章や言葉を図にしていこう。

C「これらは全部同じ意味」「何か違う」「はっきりわからない。」

この段階で、お父さんの気持ちや疑問を言う子どもがいたが、子どもたちの考えは漠然としていた。

T「一つだけの喜び」 「喜びなんて一つももらえないかもしれない」に關係する文章や言葉を図にしていこう。

C「お父さんの気持ちが変化している。」 ある子が言い出した。

T「どんな変化か考えよう。」

C「始めの一つだけの喜びは、食べ物のことを言っていた。」

これについては、ほぼ全員理解していた。

「何をもらえないのかはわからない。」

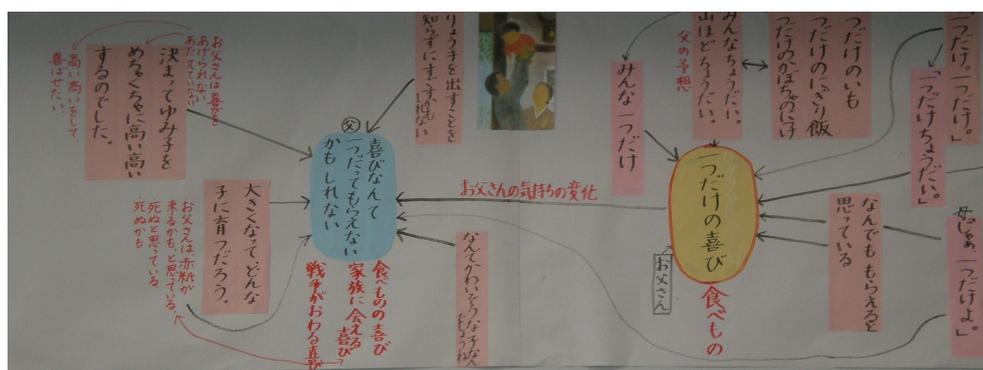
「戦争が終わる喜び」「食べ物についての喜び」「家族と会える喜び」

主題に関わる部分だが、これについてはよくわからなかった子どももいる。

「お父さんがたくさんの喜びをあげられないから、喜ばせるために高い高いをした。」

このことは、理解しきれていない子どもが多数いた。

・T(気持ちが変化したことはだいたい理解したようだったので)「もう一度、花のところに戻ろう。」



以上のような学習展開の中では、お父さんのゆみ子への気持ちを想像することも難しかったようだ。そのため本時でお父さんの気持ちに焦点があたるような発問を行うことにした。また、本時にいたるまでに、戦時中の様子についてはなかなか理解しきれていなかったため、教師から補足説明を何度も行っている。

(2) 本時について

「一つだけのお花」「一つの花」に違いがあると考えた子ども、同じと考えた子どもに分かれた。本時までに、お父さんの気持ちを想像することが難しさを感じていた子どもの実態から、別々にお父さんの気持ちを扱った方がよいと判断した。しかし、本時ではずばり違いがあるかどうかを考えた方がよかった。確かに子どもたちにとっては難しいことだったかも知れないが、友だちの考えを聞く中で自分の考えをまとめていくことができたように思う。また、本時は、子どもの思考や考えのつながりわかる板書になったとはいいたい。

ただし、前時までの話し合いを根拠に意見を述べる子どもがいたことはよかった。子どもたちが、それまでの自分

たちの思考を振り返りながら考えることができたからである。



(3) 単元の終末(発展)の扱いについて

子どもたちと題名について考えたので、「一つの花」に別の題名をつける計画だったが、別の本を読んで題名をつけるといふ形にした。これは、「一つの花」の学習を通して、作者が願いをこめて題名をつけているということを学んできたからである。

(3) ひびき合いについて

単元の序盤部分では、子どもたちが、対比部分を探し対比となっている意味を一人ひとりが考えることで、「自分とは違う、または同じ考え方があることを知りたい。」という気持ちになった。状況、言葉、その裏に隠された感情を考えてみようという意欲につながったからである。そして最後は、お父さんのゆみ子に対する気持ちに触れつつ、「一つの花」という題名の意味を考えることができた。

また、この単元では、じっくり静かに考えてみたいと願う子どもが多く、かなりの時間を使って自分の考えをまとめていた。さらに、振り返りの中に、自分以外の読みに触れることで読みの幅が広がったことがわかるような表現がよく出てきた。「　　ということは考えてもみななかった。」「　　さんの考えがなるほどなと思った。」「　　さんががんばっていた。」など、友だちと関わりながら自分の考えを深めていたことがわかった。理由や根拠をはっきりさせて考えたり話し合ったりすることで、考えに広がりが出てきたと言えるだろう。

(4) 成果と課題

一番の成果としては、子どもたちがじっくり真剣に教材と向き合い、自分の考えを持って話し合うよさを実感できたことだろう。子どもの思考の流れにそって学習を進めたことで、「何をみんなで考えるのか」を子ども自身によってはっきりさせることができた。教師が子どもとともに単元をつくることを意識したことによって、子どもたちのひびき合っている姿を見ることが多かったように思う。

課題としては、子どもたちの知的好奇心を喚起し意欲を持続させていくためには、他にどのような方法があったのか、国語という教科の特性を考えた上で検討する必要がある。今回は、言葉の裏にあるものを考えてほしいとの指導者の願いから、子どもたちが「対比」を探し、はっきりさせたいことを全体の課題とした。しかし、子どもたちは、毎時間真剣に取り組んでいたが、子どもの思考が滞ってしまったこともある。その時の教師の支援は適切であったか。子どもとともに単元をつくることと同時に、見とりをもとに一人ひとりに適切な支援ができるようにしてかなくてはならない。